



特集

子育てのまち 広がる「地域ぐるみ子育て」の輪

日 本社会全体として少子高齢化が進む昨今、経済・地域社会などに与える大きな影響が懸念されています。幸いにも、本市では、みらい平地区を中心に人口の増加が進んでおり、今後もしばらくは増加が見込まれています。

子育てを取り巻く環境を数字で見ると、核家族化が進んでおり、平成26年のデータでは、一世帯あたりの人員は2.77で、平成20年の3.02から毎年少しずつ減少しています（茨城県常住人口調査から）。

本市で行ったアンケートによれば、就学前の児童がいる家庭で「日常的に祖父母などの親族に見てもらえる」と答えたのは全体の4分の1近い約23%、「緊急時には見てもらえる」と答えたのは過半数の約59%で、親族の協力が得られる家庭が比較的多いという結果が得られました。しかしながら、「いずれもない」と回答した家庭も全体の

2割近い約18%あり、子育て世帯への支援が必要とされている実情がわかりました。

また、就学前の児童がいる家庭の母親の就労状況は、半数に近い約48%の世帯で「仕事に就いていない」と回答。加えて、6歳未満の子どもを持つ男性の育児時間は、1日平均で約40分程度と言われています。これらの数字からは、幼いわが子と日中ずっと二人きりで、育児や家事に追われる母親の姿が浮かび上がってきます。

待機児童の解消や子育て世代への経済的支援などは、行政の取り組むべき重要な課題です。しかしながら、核家族化が進む今だからこそ「地域で子どもを育てる」という考え方も大切になってくるのではないのでしょうか。

今回の特集では、さまざまなかたちで子育て支援に関わる方のインタビューを交えながら、地域ぐるみでの子育て支援について考えていきます。